

古事類苑

動物部十四

蟲中

螢

〔新撰字鏡〕虫 螢 力人反、螢、保太留

〔倭名類聚抄十九〕虫 螢 兼名苑云、螢胡丁一名熠燿、上一入反、和

〔箋注倭名類聚抄八〕按本草古今注、並云螢火一名熠燿、兼名苑蓋本於此、說文無螢字、古用燐、爾

雅燐火即熠、郭注、夜飛腹下有火、略○中陶注本草云、螢火此是腐草及爛竹根所化、初猶未如蟲、腹下

已有光、數日已變而能飛、蜀本注云、此蟲是朽草所化也、衍義云、螢常在、大暑前後飛出、月令雖曰腐

草、然非陰溼處終無、郝氏曰、今驗螢火有二種、一種飛者、形小頭赤、一種無翼、形似大蛆、灰黑色、而腹

下火光、大於飛者、及詩所謂宵行、爾雅之即熠、亦當兼此二種、但說者止見飛蟲耳、

〔類聚名義抄十〕虫 螢 ホタル

〔下學集上〕虫 螢 腐草化成、螢者也

〔八雲御抄三〕虫 螢、あきかせふくとかりにつくと云り 夏虫共云

〔日本釋名中〕虫 螢 ホタル ほは火也、たるは垂也、垂は下へさがりたる、也、

〔東雅二十〕虫 螢 ホタル 葦原中國に道速振荒振神等多有て、夜者若燿蜜火而喧響といふ事、舊事紀

にみえたれば、此物の名上世にすでに聞えたる也、ホタルとは、たとへば爾雅に螢火即熠とみえ

しが如く、ホは火也、タルは熠也、テルといひ、タルといふは、轉語なる也、萬葉集抄に、ホドロといふ